

新田・山王遺跡

新田遺跡第97次・山王遺跡第147次
発掘調査報告書

平成27年3月

多賀城市教育委員会

新田・山王遺跡

新田遺跡第97次・山王遺跡第147次
発掘調査報告書

平成27年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成25・26年度に実施した受託事業2件の発掘調査成果を収録したものです。このうち、新田遺跡第97次調査では、平安時代の堅穴住居跡や烟跡、中世の大規模な区画溝などを発見しました。当該地区は新田遺跡の西端にあたり、今までわからなかった平安時代における生活の一端が明らかとなりました。

市内の広大な遺跡に比べ、今回調査した範囲はごくわずかですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の具体的な歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました土地所有者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成27年3月

多賀城市教育委員会
教育長 菊地 昭吾

例　　言

- 1 本書は、平成25・26年度の受託事業による発掘調査2件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から經緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。震災以前の調査成果に関しては、座標値を整合させるために、再測量の成果に基づき東に約3m、南に約1mの補正をかけている。
- 4 掘図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 執筆は、I・IIIを武田健市、IIを村松稔が担当し、編集は武田が行った。資料整理及び図版作成は各執筆担当者が行い、遺物の写真撮影は村上詩乃と城口貴彰が担当した。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的環境	1
II	新田遺跡第97次調査	2
III	山王遺跡第147次調査	38

調　　査　要　項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 鈴木典男(平成25年度)
所長 板橋秀徳(平成26年度)
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
【新田遺跡第97次】 研究員 村松 稔　　調査員 高橋純平 村上詩乃
【山王遺跡第147次】 副主幹 武田健市 研究員 石川俊英
- 4 調査協力者 マックスホーム株式会社 仙台農業協同組合
- 5 調査従事者 【新田遺跡第97次】 赤間幸祐 澤美静香 阿部純一 大山邦夫 小川勝彦 小野寺紀代子 片桐庄記 加藤義宏 小松美樹 今野和子 佐々木一郎 佐々木正範
佐々木洋子 佐藤良雄 須田英敏 高橋由美子 戸枝瑞枝 中込広美 根本清 松川謙二 三浦侑士 横尾光男
【山王遺跡第147次】 澤美静香 阿部純一 錬田修一 菊地清喜 工藤敦子 小松まり 西條金三 櫻井良博 佐藤良雄 須田英敏 高橋由美子 戸枝瑞枝 中込広美 中島弘 星芳子 松川謙二 山田理
- 6 整理従事者 【新田遺跡第97次調査】 赤沼たみ 遠藤睦美 千葉都美 宮城ひとみ
【山王遺跡第147次調査】 宮城ひとみ

調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第97次	新田字西後41番、43番1の一部	平成25年11月1日～平成26年1月24日	309m ²	村松・高橋
2	山王遺跡第147次	南宮字伊勢89・90地内	平成26年11月27日～平成27年1月14日	126m ²	武田・石川

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S B : 挖立柱建物跡 S I : 穴穴住居跡 S D : 溝跡 S K : 土壙 P it : 柱穴及び小穴
S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』(多賀城市教育委員会 2003)で報告している。
 - (1) 土師器杯

A類: ロクロ調整を行わないもの
B類: ロクロ調整を行ったもの

B I 類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
B II 類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
B III 類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
B IV 類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
B V 類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I ・ B II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものを a、静止糸切りによるものを b、回転糸切り(糸切り)によるものを c として細分する
 - (2) 土師器甕
 - (3) 須恵器杯
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982)の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と、「扶桑略記」延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある(町田洋「火山灰とテフラ」「日本第四紀地図」1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10 C頃の降下火山灰について」「中山久夫教授退官記念地質学論文集」1991)。本書ではこれらの研究成果を基に、灰白色火山灰を10世紀前葉に降下したものとする。

I 遺跡の地理的環境

1 地理的環境

多賀城市は、宮城県の中央やや北東寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。

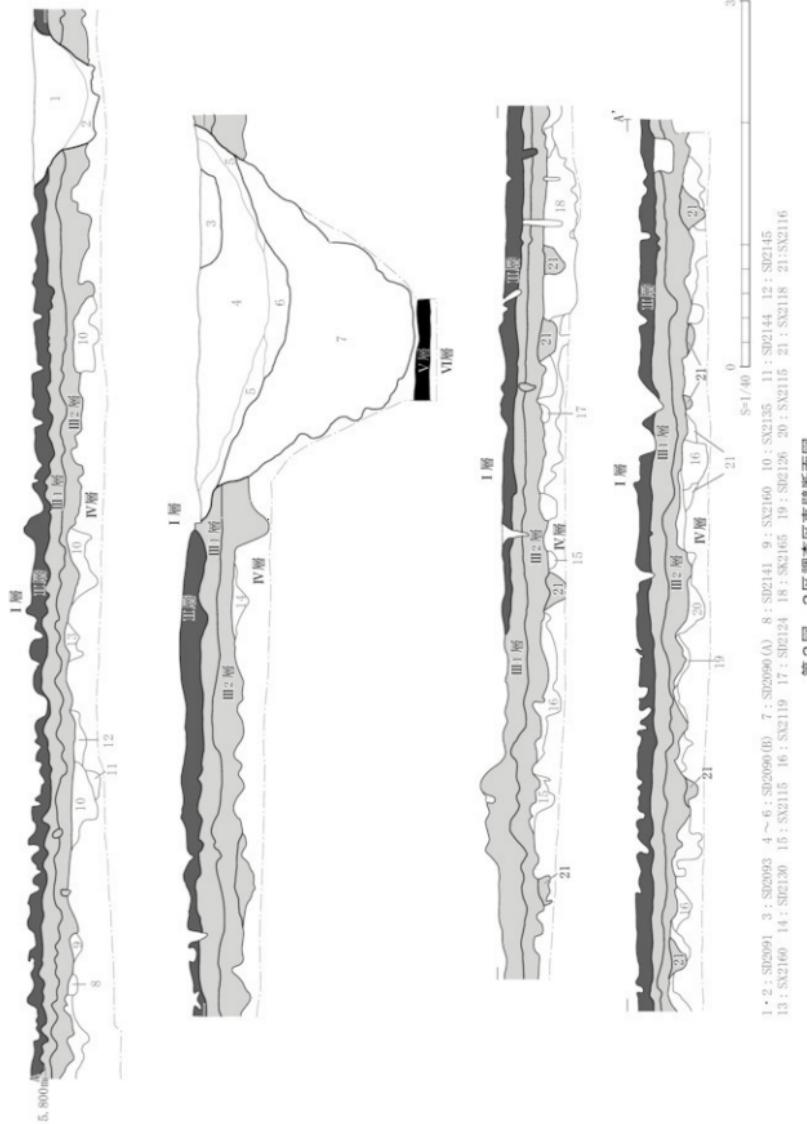
市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は松島・塩釜方面から延びる標高40~70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相を見せており。沖積地は仙台平野の北東端部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉塩釜線沿いには標高5~6mの微高地が伸びており、その北側は利府町に跨る低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などが分布しており、海岸に近い地域には浜堤跡も確認できる。このうち、県道沿いに確認できる微高地は七北田川や砂押川の沖積作用によって形成された自然堤防と考えられており、新田・山王・市川橋遺跡など市内でも大規模な遺跡が隣接して所在している。



第1図 多賀城市的位置



第2図 調査区位置図



第3図 3区調査区東壁断面図

これらの範囲は、9日からⅣ層上面の深さまで重機で掘削を行い、以後Ⅱ層上面の調査とⅣ層上面の調査を並行して行った。Ⅱ層上面の調査は、22日までに S A 2094・2095 柱列跡と S D 2091～2093 溝跡の調査を終了することができたが、一方で、SD2090 溝跡が当初の予想よりも深かったことから掘削する土量が多く、調査は28日までかかった。翌29日から重機で残るⅡ層及びⅢ層の除去を行った。Ⅳ層上面の調査では、2区西側で発見した SI2103 堅穴住居跡や1区で発見した S D 2101 溝跡等のほか、2区から3区にかけて多数の小溝群を検出した。S I 2103 堅穴住居跡や複雜に重なり合う小溝群の重複関係を理解するために相当の日数を要し、12月12日によく全体の重複関係を把握できた。また、12月18日には S B 2105 掘立柱建物跡を確認するなど、調査を進めるごとに新たな遺構が検出される状況であり、調査は年内に完了することができなかった。調査の終了は、平成26年1月22日までかかり、23日には埋め戻しと機材の撤収を行い、現地調査の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層序(第3図)

- 今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。
- I 層：現代の耕作土である。
 - II 層：2区から3区にかけて確認した。第95次調査のⅢ1層に対応する中世の遺構検出面である。IV層に起因するブロック状の黄色砂質土を含む黒色粘質土で、厚さは最大18cmである。
 - III 1層：調査区の全域で確認した。第95次調査のⅢ2層に対応する。IV層に起因するブロック状の黄色砂質土を含む黒褐色粘質土で、厚さは15～18cmである。
 - III 2層：調査区の全域で確認した。第95次調査のⅢ2層に対応する。黒褐色～暗灰黄色粘質土で、厚さは25cmである。
 - IV 層：第95次調査のIV層に対応する古代の遺構検出面である。黄色砂質土で、厚さは13mである。プラント・オパール分析の結果、スキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。チマキザサ節型がやや多い以外はいずれも低い密度である。
 - V 層：S D 2090 溝跡の底面付近でのみ確認した。黒色粘土層で、厚さは12cmである。プラント・オパール分析の結果、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型および海綿骨針が検出された。ヨシ属とチマキザサ節型が比較的高い密度であるが、他は低い密度である。こうしたことから、V層堆積時は、湿地もしくはそれに近い環境であったと考えられる。
 - VI 層：S D 2090 溝跡の底面付近でのみ確認した。黄褐色砂層である。プラント・オパール分析の結果、ヨシ属、スキ属型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型がいずれも低い密度で検出された。

(2) 発見遺構と遺物

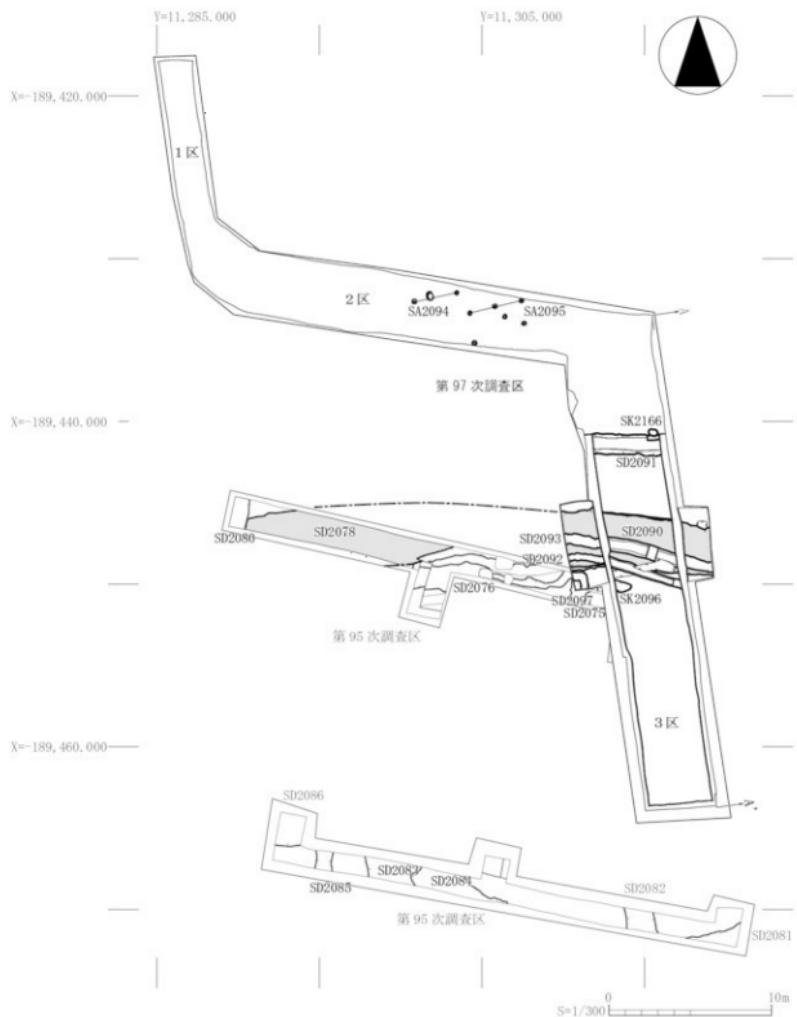
今回の調査では、Ⅱ層上面で柱列跡2条、溝跡5条、土壤2基を、IV層上面で堅穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1軒、溝跡30条、土壤10基、小溝群を12群発見した。以下、検出した遺構面ごとに示す。

〔Ⅱ層上面発見の遺構〕

S A 2094 柱列跡(第4・5図)

【位置】2区中央で発見した。

【柱間】2間以上の東西方向の柱列である。



第4図 II層上面検出遺構 平面図

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は3基(P 1～3)検出しており、いずれも柱抜取り穴を確認した。P 1とP 3は柱痕跡と似た形で、またP 2についても底面がやや窪んでいる。これらはすべて、柱のあたり痕跡を示していると考えられる。

【方向・規模】東で12度北に偏している。規模は総長2.7m、柱間は西から1.04m、1.66mである。

【堀方】P 1とP 3の平面形は方形を基調とし、規模はP 1でみると長辺28cm、短辺27cm、深さ29cmである。

【埋土】IV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を少量含む黄灰色土である。

【遺物】土師器甕（B類）が出土している。

S D 2093溝跡（第4・6図）

【位置】3区中央で発見した。

【重複】S D 2090溝跡より新しい。

【方向・規模】東で約12度南に偏しておおり、長さ9.3m確認した。上幅92cm、下幅50～56cm、深さ17cmである。

【壁・底面】壁は急角度で立ちあがり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】黄灰色土である。

【遺物】土師器甕、須恵器壺（Ⅲ類）、砥石が出土している。

S D 2090溝跡（第4・7図）

【位置】3区中央で発見した。規模や位置関係から第95次調査で発見したS D 2078と一連のものと考えられる。

【重複・変遷】S D 2092およびS D 2093と重複し、それより古い。およそ同位置で2時期の変遷（A→B期）を確認した。

【方向・規模】B期でみると東で約4度偏しており、長さ9m確認した。また、第95次調査で発見したS D 2078を含めると約29m以上におよぶ。

・A期

【規模】残存する規模は、上幅約3.2m、深さ約1.6mである。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層に分けられる。1層は黄色土と黒色粘土の互層で、2層は植物遺体を多量に含む褐灰色粘土である。

【遺物】土師器甕（B類）・双耳壺・甕（B類）、須恵器壺（Ⅲ類）・甕、瓦が出土している。

・B期

【規模】上幅約3.2～3.6m、深さ約75cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっている。底面は西に傾斜しており、東西の比高は25cmである。

【埋土】2層に大別できる。1層は黄灰色土、2層は褐灰色土～黄灰粘土である。

【遺物】無釉陶器甕、磁器壺、土師器甕（B V類）・甕、須恵器甕・甕が出土している。

S K 2096土壤（第4・6図）

【位置】3区中央で発見した。第95次調査で発見したS K 2087と同一とみられる。

【規模・平面形】平面形は東西に長い不整形で、規模は東西10m、南北80cmである。

【埋土】黄色土である。

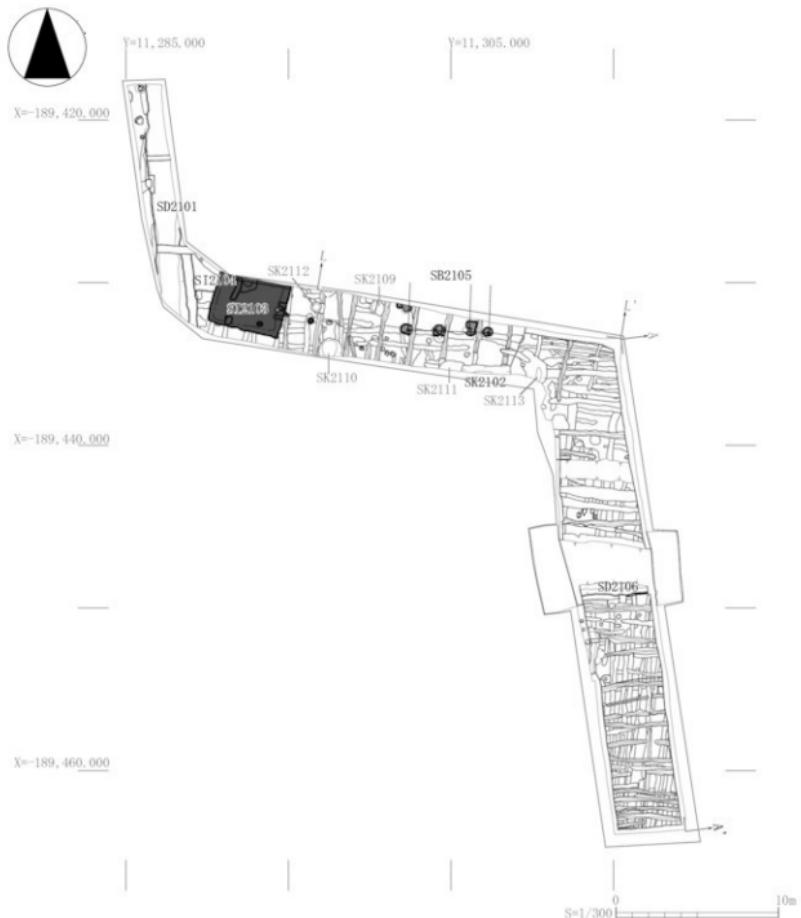
【遺物】出土していない。

S K 2166土壤（第4・6図）

【位置・重複】3区北側で発見した。S D 2091と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】平面形は楕円形で、規模は長軸60cm、短軸40cmである。

【遺物】出土していない。



第8図 N層上面検出遺構 平面図

〔N層上面発見の遺構〕

S B 2105掘立柱建物跡(第8・9図)

【位置】2区中央で発見した。

【桁行・梁行】5基の柱穴から推測した南北棟の建物跡であり、3間分の南妻およびそれより北側に1間分を確認した。南東隅柱から東に1個目の柱穴は、南妻の柱列と柱筋をそろえるものの、柱間が他のそれより短いことから、東側に庇がつくとみられる。

【柱痕跡・抜取り穴および切取り穴の有無】P 9において柱切取り穴および柱痕跡を確認した。その他のすべてにおいて柱抜き取り穴を確認しており、P 8とP 11では柱のあたり痕跡を確認した。

【重複】S I 2104 および S X 2108・2135・2161 と重複しており、いずれよりも新しい。

【平面形・方向】平面形は方形である。方向は南辺でみると東で約15度南に偏している。

【規模】南辺で約4.4m、東辺で3.5m以上である。

【埋土】2層に分けられる。1層はIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土と微量の炭化物を含む暗褐色土で、2層は炭化物とブロック状の焼土を含む黒褐色土である。

【床面の状態】掘方底面の凹凸を平坦になるようにIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む黒褐色土で貼床が施されている。貼床の厚さは4～12cmである。しかし、S I 2104と重複している範囲では、人為的に埋めたとみられるS I 2104の埋土を床としている。

【壁の状態】壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、その高さは西壁で15cmである。

【柱穴】柱穴を2基（P 1・2）確認した。掘方の平面形については、P 1は柱抜き取り穴に大きく壊されているため不明である。P 2は梢円形であり、長軸39cm、短軸29cm、深さ70cmである。埋土は、P 2でみると柱抜き取り穴が暗褐色土で、掘方は黒褐色土である。いずれもIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を含み、掘方には特に多量に確認できる。

【カマド】東辺はほぼ中央に設けられている。燃焼部と煙出しの穴および煙道の一部を確認した。規模は燃焼部最大幅66cm、奥行き60cmである。残存する側壁高は最大12cmである。側壁部はIV層に起因する黄褐色砂質土を微量に含む黒褐色土で構築されている。カマド内堆積土は2層確認し、1層は炭化物を含む黒褐色土、2層は黒褐色土である。いずれもIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を含む。カマド崩落土は1層確認し、カマド構築土と同じ黒褐色土にブロック状の焼土と炭化物を多く含む層である。

煙道は削平のため一部しか確認できないが、カマド東側に炭化物を多く含む煙出し穴を確認した。そこから復元できる煙道の長さは約1.8mと推定される。煙出し穴の平面形は円形で、規模は直径36cm、深さ26cmである。埋土は2層に分けられる。いずれもIV層に起因するブロック状の黄褐色土を含む暗褐色土で、1層には多量の炭化物を含んでいる。

【周溝】検出したすべての壁面で確認できた。西壁の一部で周溝は途切れている。上幅25～50cm、下幅6～10cm、深さ27cmである。埋土は2層に分けられ、1層は暗褐色土、2層は黒褐色土である。いずれもIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多量に含んでおり、人為的に埋め戻したと考えられる。また、カマド構築土は周溝埋土を覆っており、柱穴は周溝を壊してつくられていることから、カマド構築時および柱穴がつくられる時には既に埋まっていたと考えられる（註1）。

【その他の施設】北西側でP i t 1～3を確認した。いずれも埋土に覆われ、貼床上面で検出している。重複関係から古い順にP i t 3→P i t 2→P i t 1に変遷している。

P i t 1：平面形は南北に長い溝状の穴で、規模は南北約1.3m、東西38cm、深さ18cmである。埋土は2層に分けられる。1層は黒褐色土、2層はIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む黒褐色土である。遺物は土師器壺（B類）、須恵器壺・甕が出土している。

P i t 2：平面形は不整形で、規模は南北50cm以上、東西1.3m、深さ40cmである。埋土は2層に分けられる。1層はIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を含む黒褐色土、2層は炭化物と焼土を含む黒色土である。遺物は土師器壺（A類・B類）が出土している。

P i t 3：平面形は不整形で、規模は南北90cm以上、東西95cm以上、深さ25cmである。埋土は1層確認でき、IV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む暗褐色土である。遺物は出土していない。

【遺物】1層から土師器壺(BⅡ類)(第34図2)・甕(A・B類)(第34図6)、須恵器壺(Ⅲ類・V類)(第34図3・4)・双耳壺(第34図5)・甕・長頸瓶、カマド崩落土から土師器甕(B類)、須恵器壺、カマド内埋土から土師器甕、須恵器壺、カマド構築土から土師器甕・甕(B類)、須恵器壺(第34図1)、周溝から土師器甕(B類)・甕(B類)、須恵器甕・甕、貼床から須恵器甕・甕が出土している。

S I 2104 穫穴住居跡(第8・11図)

【位置】2区西側で発見した。

【重複・残存状態】S I 2103とS D 2101およびS X 2135と重複しており、S X 2135より新しく、S I 2103とS D 2101より古い。S I 2103とS D 2101によって壊され、また調査区外に広がるため南側一部を確認したのみである。

【平面形・方向】方形と推定され、方向は南辺で測ると東で約2度南に偏している。

【規模】南辺では、24m以上である。

【埋土】IV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土と微量の炭化物を含む黒褐色土である。人為的に埋め戻されたとみられ、S I 2103と重複している部分では、この埋土上面でS I 2103の床となっている。

【床面の状態】掘方底面の凹凸が平坦になるようにIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む黒褐色土で貼床が施されている。厚さは5~15cmである。

【壁の状態】床面からほぼ垂直に立ち上がる。

【柱穴・カマド】確認できなかった。

【周溝】南辺で長さ12m確認した。規模は、上幅30cm、下幅10cm、深さ13cmである。周溝埋土は、IV層に起因するブロック状の黄褐色土を含む黒褐色土である。

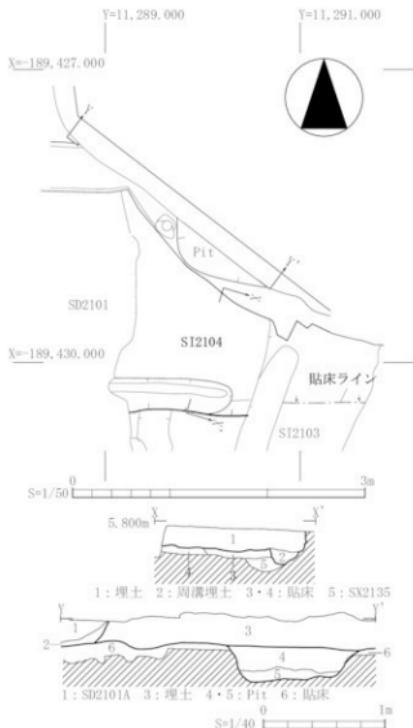
【その他の施設】Pit 1を発見した。ほとんどが調査区外となるため、平面形や規模は不明である。深さは28cmである。埋土は2層に分けられる。いずれも黒褐色土であり、1層はIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を1層では少量に、2層は多量に含んでいる。

【遺物】1層と貼床から土師器甕が出土している。

S D 2101溝跡(第8・12・13図)

【位置・形態】1区で発見した南北方向の溝跡である。

【重複・変遷】S I 2104、S X 2135と重複しており、それらより新しい。位置を約60cm西へ移動して2時



第11図 S I 2104 穫穴住居跡 平面・断面図

【重複】S X 2108・2162と重複しており、いずれよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は円形で、規模は直径63cm、深さは38cmである。

【壁・底面】壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層に分けられる。1・2層は黒褐色粘土で、下層ほどIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む。

【遺物】出土していない。

S K 2164 土壙(第8・15・19図)

【位置】2区西側で発見した。

【重複】S X 2108と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】平面形については、調査区外に及んでおり、詳細は不明である。規模は南北42cm、東西81cm、深さ13cmである。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。

【埋土】IV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S K 2167 土壙(第8・15・19図)

【位置】2区西側で発見した。

【重複】S K 2109と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】平面形については、ほとんどが調査区外に抵がっており詳細は不明である。規模は東西56cm以上、南北30cm以上、深さ13cmである。

【壁・底面】壁の立ち上がりは、東側は緩やかで、西側は急角度である。底面は緩やかに起伏しており、一様ではない。

【埋土】IV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を含む黒褐色土である。

【遺物】出土していない。

S K 2102 土壙(第8・16図)

【位置】2区東側で発見した。

【重複】S K 2111、S X 2108と重複しており、これらより新しい。

【平面形・規模】ほとんどが調査区外にあたるが、確認できた部分ではおよそ方形と推測される。規模は東西2.9m、南北54cm以上、深さ11mである。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がり、一部段状になっている部分がある。底面は中央付近がやや低くなっている。

【埋土】3層に分けることができる。1・2層は黒褐色土、3層は黒褐色砂質土である。また、各層にIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を多く含み、2層は特に多量に確認できる。

【遺物】土師器甕、須恵器坏、砥石が出土している。

S K 2111 土壙(第8・16図)

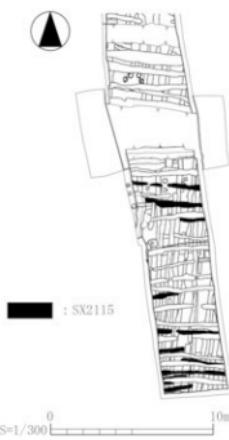
【位置】2区東側で発見した。

【重複】S K 2102、S X 2108と重複しており、S X 2108より新しく、S K 2102より古い。

【平面形・規模】調査区外におよんでおり、またS K 2102によって壊されているため、平面形は不明である。

【重複】S D 2122・2126、S K 2120、S X 2116・2119・2136と重複しており、S K 2120、S X 2116より古く、S D 2122・2126、S X 2119・2136より新しい。

【方向・規模】方向は東で約7～9度北に偏するものと、約1～5度南に偏するものがある。規模は北



第29図 S X 2115小溝群 平面略図 第30図 S X 2116小溝群 平面略図
と、上幅48cm、深さ16cmである。

【埋土】北から2条目でみると、IV層に起因するブロック状の黄褐色土を含む褐配色土である。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がっており、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

S X 2116小溝群(第3・8・28・30図)

【位置・形態】3区南側で発見した東西方向の小溝群である。0.5～1.9mの間隔で17条検出した。

【重複】S D 2126・2127・2130・2132、S K 2165、S X 2115・2119・2139・2140と重複しており、そのいずれよりも新しい。

【方向・規模】方向は東で約5～6度北に偏するものと、東で約3～5度南に偏するものがある。規模は北から1条目でみると、上幅75cm、深さ15cmである。

【埋土】北から1条目でみると、IV層に起因するブロック状の黄褐色土を含む黒褐色粘質土である。

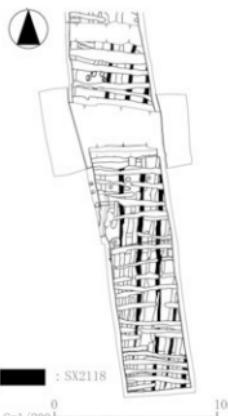
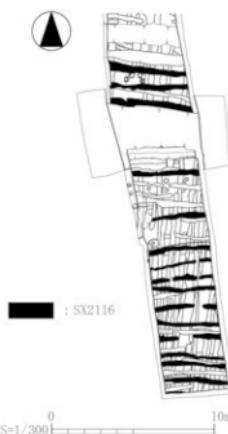
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏があり一様ではない。

【遺物】出土していない。

S X 2118小溝群(第3・8・28・31図)

【位置】3区南側で発見した南北方向の小溝群である。約0.7～1.2mの間隔で6条検出した。

【重複】S D 2121・2122・2123・2124・2125・2127・2130、S X 2115・2116・2119・2136・2139と重複しており、S D 2121・2122・2124・2130、S X 2115・2116・2119・2136・2139より古く、



第31図 S X 2118小溝群 平面略図

S D 2123・2125・2127より新しい。

【方向・規模】方向は、北で約1～8度東に偏している。規模は、西から2条目でみると上幅34cm、深さ18cmである。

【埋土】西から2条目でみると、2層に分けられる。1層は黒褐色粘質、2層はIV層に黒色粘土である。いずれの層もIV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を含んでおり、1層では少量、2層では多量に確認できる。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がっており、底面は中央が最も低くやや窪んでいる。

【遺物】出土していない。

S X 2119小溝群(第3・8・28・32図)

【位置・形態】3区南側で発見した南北方向の小溝跡である。0.7～0.8mの間隔で6条検出した。

【重複】S D 2124～2127、S X 2115・2116・2118と重複しており、S D 2124・2126、S X 2115・2116より古く、S D 2125・2127、S X 2118より新しい。

【方向・規模】北で約7度東に偏しており、規模は西から4条目でみると、上幅36cm、深さ12cmである。

【埋土】西から4条目でみると、IV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を少量含むにぶい黄褐色土である。

【壁・底面】西から4条目でみると、壁は急角度で立ち上がっており、底面は中央が最も低くやや窪んでいる。

【遺物】出土していない。

S X 2136小溝群(第8・28・33図)

【位置・形態】3区南側で発見した南北方向の小溝跡である。0.3～0.6mの間隔で4条検出した。

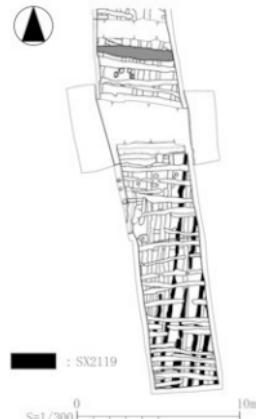
【重複】S D 2123～2125、S K 2120、S X 2115・2116・2118と重複しており、S K 2120、S X 2115・2116より古く、S D 2123～2125、S X 2118より新しい。

【方向・規模】北で約4～6度東に偏しており、規模は西から4条目でみると、上幅34cm、深さ13cmである。

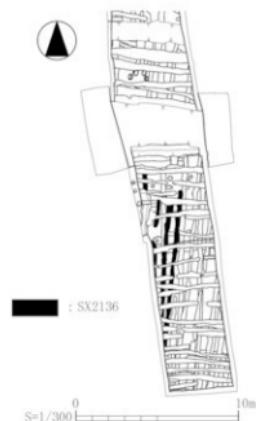
【埋土】西から4条目でみると、IV層に起因するブロック状の黄褐色砂質土を少量含む黒褐色土粘質土である。

【壁・底面】西から4条目でみると、壁はゆるかやに立ち上がり、底面は中央がもっとも低くなっている。

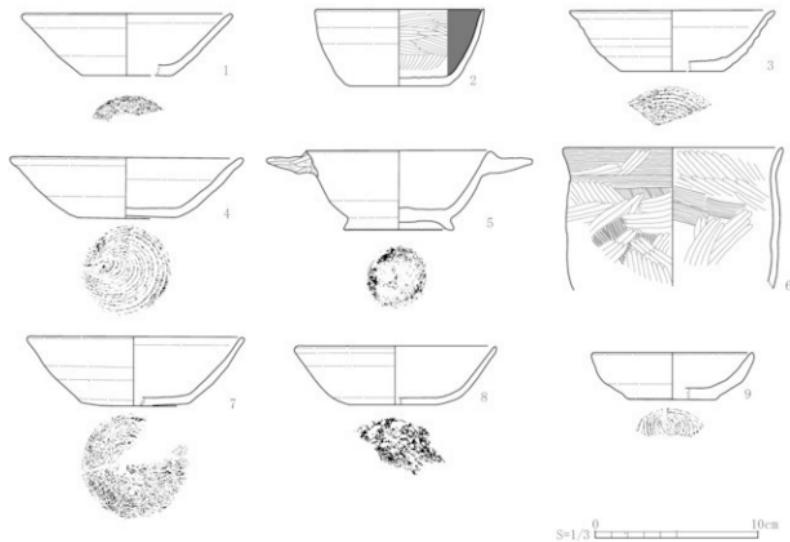
【遺物】出土していない。



第32図 S X 2119小溝群 平面略図



第33図 S X 2136小溝群 平面略図



番号	種類	出土遺物	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	万葉 図版	登録 番号	備 考	単位：cm
			外　面	内　面							
1	環形器 环	SE2103 カマド構築土	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.6 2/24	5.5 6/24	3.8		R2	V型	
2	土器器 环	SE2103 1号	ロクロナデ 底部：磨滅	ロクロナデ ハラミガキ、黒色処理	10.2 3/24	6.0 6/24	5.7		R19	B型	
3	環形器 环	SE2103 1号	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.4 6/24	6.3 6/24	3.7		R3	V型	
4	環形器 环	SE2103	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	14.0 2/24	5.8 24/24	3.7		R6	V型	
5	環形器 双耳环	SE2103 1号	ロクロナデ	ロクロナデ	11.2 20/24	6.6 24/24	4.9	29	R1		
6	土器器 类	SE2103 1号	口縁：ココナデ、ハラミガキ 体部：研毛目、ハラミガキ	ハラナデ、ハラミガキ	13.2 24/24	—	—		R4	A型	
7	環形器 环	SE2113 1号	ロクロナデ 底部：ハラ切り	ロクロナデ	13.1 18/24	6.6 30/24	4.25	210	R7	III型	
8	環形器 环	SE2110 1号	ロクロナデ 底部：ハラ切り	ロクロナデ	12.1 3/24	5.6 30/24	3.6		R8	III型	
9	かわらけ 小皿	1号	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	9.7 3/24	5.4 6/24	2.9		R10		

第34図 出土遺物

3 考察

今回の調査では、II層上面で柱列跡2条、溝跡5条、土壙2基を、IV層上面で堅穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1軒、溝跡30条、土壙10基、小溝群を12群発見した。はじめに、本調査および確認調査として先行して実施した第95次調査で確認した層序との対応関係について整理しながら、それぞれの遺構検出面ごとに年代について述べる。

(1) 層序の整理

今回の調査である第97次調査と第95次調査で発見した層序を模式的に表示する(第35図)。このうち遺構検出面となっているのは、第95次調査のIII1層とIV層、第97次調査のII層とIV層のそれぞれ上面である。

第95次調査のIII1層と第97次調査のII層は、いずれもブロック状の黄褐色土あるいは砂質土を含む黒褐色粘質土であり、土質は同一である。また、この上面で発見したSD 2078溝跡(第95次調査)とSD 2090溝跡(第97次調査)はその規模や位置関係から同一の遺構とみられることから、第95次のIII1層と第97次のII層は同一の層と考えらる。また、第95次調査ではSD 2078溝跡の検出面から13世紀第1四半期頃とみられる無釉陶器壺が出土していることから、この層の上面は中世以降の遺構検出面と考えられる。

第95次調査のIV層と第97次調査のIV層はいずれも黄褐色砂質土で、第95次調査ではブロック状の暗褐色土を含んでいる。内容物の有無に若干の差異はあるが、主体となる層の土質は同一である。また、第97次調査ではIV層と上層のIII2層の間に灰白色火山灰が確認され、さらに第97次調査のIV層上面で検出したSD 2106溝跡の埋土にも灰白色火山灰の自然堆積が確認されることから、IV層は10世紀前葉以前に堆積した古代の遺構検出面層とみられる。

(2) 遺構の年代

①中世

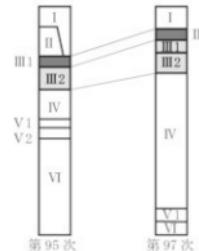
II層上面検出の遺構では、SA 2094・2095、SD 2090・2093・2097、SK 2096・2166がある。これらの遺構から出土した遺物は、すべて古代に属するものである。

SD 2090 Aの2層は小枝や木葉など植物遺体を多量に含んでおり、これらは溝が機能していた時に混入したものとみられる。これら植物遺体について、放射性炭素年代(AMS測定)を行ったところ11世紀中頃～13世紀初頭頃の年代が示された。また、第95次調査では一連の溝跡とみられるSD 2078の検出面からは13世紀第1四半期のものと考えられる無釉陶器壺が出土していることから、この頃以降に埋没したものと推測され、放射性炭素年代の結果とも矛盾しない。この他磁器の小破片が1点出土しているが、詳細が不明であり、年代については明らかではない。

以上のことから、SD 2090は11世紀中頃～13世紀初頭頃に機能していたものと推測される。

②古代

今回の調査で発見した遺構について、新旧関係を整理すると第36図のとおりである。このうち、出土遺物や埋土の状況から年代が直接推定できるのはSI 2103・2104、SK 2110・2113、SD 2106、SX 2116である。



第35図 第95・97次調査 層序模式図

S I 2103の年代について検討する。はじめに出土した土器全体を概観した後、層位的にみて堅穴住居構築時・機能時・廃絶時と考えられる各土器群について詳述する。堅穴住居全体では総点数253点の遺物が出土している(表1)。出土遺物には、土師器坏・甕、須恵器坏・双耳坏・甕・長頸瓶があり、須恵系土器は全く出土していない。また、土師器の成形技法がわかるもののうち、A類が2点、B類が47点出土しており、B類が95%を占めている。

カマド構築土・周溝・貼床埋土から出土した遺物は、堅穴住居構築時を示していると考えられる。このうち坏類は、土師器坏はB類が1点出土しているほか、底径／口径比が0.44の須恵器坏(V類)が1点出土している。土師器坏と須恵器坏の構成比率は、土師器坏が40%、須恵器坏が60%と須恵器坏が多い。

カマド内堆積土と床面直上から出土した遺物が堅穴住居機能時を示していると考えられる。坏類は須恵器坏が2点のみ出土しているのみである。

カマド崩落土と1層から出土した遺物が堅穴住居廃絶後を示していると考えられる。坏類については、土師器坏がB II類とB類が各1点、須恵器坏がIII類が2点とV類が3点出土している。器形がわかるものは、底径／口径比が0.59の土師器坏(B類)と底径／口径比が0.50、0.41の須恵器坏(V類)が出土している。土師器坏と須恵器坏の構成比率は、土師器坏が26%、須恵器坏が74%であり、須恵器坏が多数を占めている。

以上、S I 2103出土土器群についてみると、次のことが指摘できる。

- ①土師器はB類を主体としており、須恵系土器が全く出土していない。
- ②須恵器坏の器形については、機能時のもので0.44、廃絶時のもので0.41～0.51である。
- ③須恵器坏の分類でみると、構築時ではIII類が2点、廃絶時ではIII類が2点とV類が3点出土しており、須恵器坏がIII類を主体とする時期からV類が増加する時期の間にいると推定される。
- ④土師器坏の器形については、廃絶時のもので0.59である。
- ⑤土師器坏より須恵器坏が多く、構築時で6割、廃絶時で7割を占めている。

以上の特徴と類似する土器群は、9世紀中葉頃と推定されている市川橋遺跡S X 1351 D期3層出土土器と9世紀後半と考えられる同S X 3400出土土器があり、これらと比較してみる。

須恵器坏の底径／口径比の値については、市川橋遺跡S X 1351 D期3層が平均値で0.54、市川橋遺跡S X 3400が0.48で、S I 2103の機能時および廃絶時いずれも後者に近い値を示している。

また、土師器坏と須恵器坏の出土比率にみる須恵器坏の占める割合については、市川橋遺跡S X 1351 D期3層が64%、S X 3400が9%であり、S I 2103の構築時は60%、廃絶時は74%であることから、市川橋遺跡S X 1351 D期3層に近い割合である。

一方、土師器の底径／口径比の値については市川橋遺跡S X 1351 D期3層にも認められる値であるが、市川橋遺跡S X 3400は最大値でも0.49とより小さい。

以上のことから、S I 2103の構築時～廃絶時いずれについても、市川橋遺跡S X 3400より古い要素が認められる。一方で、市川橋遺跡S X 1351 D期3層とは須恵器坏が占める割合については近似するものの、須恵器坏の底径／口径比の値はこれより小さいことは、新しい要素として認められる。したがって、S I 2103出土土器は9世紀中葉から後葉頃の年代を推定しておきたい。

S I 2104については、年代を推定できる遺物が出土しなかったが、S I 2103との重複関係からこれ以前といえる。また、S I 2103とS I 2104の埋土の状況を詳細にみると、S I 2104を人為的に埋め戻した埋土でS I 2103の床面としていることから、S I 2104を埋め戻した直後に、S I 2103を建てている状況が

器種		分類	1層	カマド 崩落土	小計1	床面直上	カマド内 堆積土	小計2	カマド 構築土	周溝	貼床埋土	小計3	合計
土師器	环	B	2							1			
		B II	1		12							4	16
		不明	7	2					1	1	1		
	甕	A	1								1		
		B	30	9	161			4	1	1	1	23	188
		不明	116	5		2	2		1	8	10		
須恵器	环	Ⅲ	2							2			
		V	3		34			2	1			6	42
		不明	29				2		1		2		
	双耳环			1	0							0	0
	甕		5		5					1		1	6
	長頭瓶		1		1							0	1
	合 計		197	17	213	2	4	6	5	14	15	34	253

表1 S I 2103遺物集計表

推測される。したがって、年代もS I 2103とあまり隔たらない9世紀中葉から後葉の間におさまるものとみられる。

S K 2110・2113については、須恵器環の器形や土師器環と須恵器環の構成比率がS I 2103と共に通していることから、これらの年代も9世紀中葉から後葉頃と推測される。また、SD 2106については遺物は出土していないが、B期2層が10世紀前葉に降下した灰白色火山灰の自然堆積層であることから、A期は10世紀前葉以前、B期は10世紀前葉頃と推定される。さらに、SX 2116については、その埋土がⅢ2層と同一か近似していることから、Ⅲ2層が堆積することによって埋没したものと推測される。灰白色火山灰はⅣ層とⅢ2層の間に認められることから、Ⅲ2層の堆積は灰白色火山灰が降下した10世紀前葉以降といえる。したがって、SX 2116についてもこの頃と推定される。

この他、溝跡や土壤、小溝群については、遺物が出土していないことなどから直接年代を推定する手がかりが得られなかったが、年代が明らかとなったS I 2103、S K 2110・2113、SD 2106、SX 2116との前後関係や、灰白色火山灰が埋土中に含まれていないことから、およそ9世紀中葉以前と推定される。

(3) 遺構の性格

① Ⅱ層上面発見の遺構

SD 2090は第95次調査で発見したSD 2078と一連の溝跡で、最大上幅3.6m、検出面からの深さは2.3mもある大規模な溝跡である。性格は、新田遺跡寿福寺地区で発見されている15・16世紀の屋敷を区画する溝のような区画溝や、七北田川が近くに存在することから灌漑のための給排水の施設などが推定される。しかし、SD 2090の周辺の様子や関連する遺構が明らかでないことから、その性格については不明とせざるをえない。

② Ⅳ層上面発見の遺構

古代の遺構の変遷は第36図のようにまとめられ、以下古い順にその性格について述べる。

古い時期は3区において小溝群がつくられる。これら小溝群は、深さは浅く、底面に凹凸があるものも認められるなど、それまで市川橋遺跡や山王遺跡、新田遺跡で確認できる畑の耕作にかかるるものされる小溝群と共通点があることから、今回発見したこれら小溝群も畑などの生産に関わるものと推定しておきたい。なお、遺物が全く出土していないことも、生産に関わる遺構であることを裏付けていると考えられる。

3区ではその後10世紀前葉以降まで継続して生産域であったと推測される。

生産域はS X 2135がつくられる時期に2区まで広がる状況がうかがわれる。2区ではその後S B 2105が建てられ、それまで生産域であった当該地区が変化している。調査範囲が限られており、S B 2105の建物全体が把握できなかったことや、調査区内では他に建物が確認できなかつたことなどから、S B 2105の具体的な性格については不明である。S B 2105が廃絶した後、再び小溝群であるS X 2108がつくられる(註2)。その後S I 2103・2104が連続して建てられた後に、1区でS D 2101がつくられる。

以上、おむね3区は9世紀中葉以前から10世紀前葉以降まで一貫して生産域であったのに対し、2区では9世紀中葉～後葉頃にS B 2105やS I 2103・2104が建てられるなど、その土地利用が変化することが明らかとなった。

4 まとめ

1 新田遺跡の北西、現在の七北田川の東岸において、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、溝跡、土壌、小溝群を発見した。年代は、S I 2103とS K 2110・2113は9世紀中葉～後葉頃、S D 2106は10世紀前葉を中心とした年代と考えられる。

2 調査区南側の3区では、9世紀中葉以前から一貫して畠と推測される生産域であったと推測される。一方、2区では9世紀中葉から後葉頃に建物や堅穴住居が建てられ、土地利用が変化している。

(註1) S I 2103の周溝とカマドおよび柱穴の重複関係から、周溝を入為了に埋めてからカマドと柱穴が作られていることがわかる。こうしたことから、周溝が埋没する前後で2時期の変遷(A→B期)も想定できるが、住居の拡張などがみられないことや、床面が1時期しか確認できなかつたこと、古い時期の施設が周溝のみで柱穴やカマドなど堅穴住居を構成する主要な施設が確認できなかつたことから、ここでは1時期として報告する。

(註2) S X 2108やS X 2161はその他の小溝群と比較して、深さが深く、壁も急角度で立ち上がりつており、断面がV字状に近い形をしていることなどが、他の小溝群と異なっている。こうした違いは生産する作物の違いによるもの可能性も考えられるほか、畠以外の性格もあわせて考慮しなければならないであろう。

参考文献

多賀城市教育委員会「市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書II」・多賀城市文化財調査報告書第70集
2003

多賀城市教育委員会「多賀城市内の遺跡2—平成20年度発掘調査報告書—」・多賀城市文化財調査報告書第95集 2009
宮城県多賀城跡調査研究所「宮城県多賀城跡調査研究所年報1992」1991



1 SD 2090溝跡(西から)



2 SD 2091溝跡(東から)



3 SB 2015掘立柱建物跡(南東から)



4 SI 2104竪穴住居跡(西から)

写真図版1



5 S I 2014 竪穴住居跡カマド（西から）



6 SD 2101 溝跡（北から）



7 3区南側 小溝群（南西から）



8 3区南側 小溝群（北東から）



10 須恵器双耳杯 (S I 2103 第34図5 R 1)



10 須恵器杯 (SK 2113 第34図7 R 7)

写真図版2

附章1 新田遺跡第97次調査における放射性炭素年代(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

新田遺跡(第97次調査)は、宮城県多賀城市新田字西後41番、43番1の一部(北緯38° 17' 45.815"、東経140° 57' 33.19")に所在する。測定対象試料は、II層で採取された土壌1点、S D 2090 B期2層出土植物片1点の合計2点である(表1)。

この調査区では、Ⅲ2層とⅣ層の層理面に10世紀前葉の灰白色火山灰が検出されており、土壌1が採取されたⅢ層はこの火山灰より上層に当たる。また、植物片2が出土した溝D1はⅢ層上面で検出された。

2 測定の意義

S D 2090溝跡等のII層上面で検出された遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

(1) 植物片の化学処理

①メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

②酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

③試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

④真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

⑥グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 土壌の化学処理

1) メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。

2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用い、表1に「HCl」と記載する。

以下、(1)~(3)以降と同じ。

4 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HO₂II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) δ 13Cは、試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) 14C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。14C年代はδ 13Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差(±1σ)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値もδ 13Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 歴年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、

過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づいた値である。曆年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の¹⁴C年代は、土壌1が 1210 ± 20 yrBP、植物片2が 890 ± 20 yrBPである。曆年較正年代(1σ)は、1が $772 \sim 869$ cal AD、2が $1056 \sim 1206$ cal ADの間に各々2つの範囲で示される。II層採取土壌1の年代値は、10世紀前葉の火山灰との上下関係に矛盾する。他方、II層上面で検出されたSD2090溝跡のB期2層出土植物片は、この火山灰との上下関係に整合する年代値を示した。II層の土壤に新しい炭素を含む物質に入る可能性等について、調査所見と合わせて検討する必要がある。

試料の炭素含有率は、土壌1が2%、植物片2が59%で、化学処理、測定上の問題は特に認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

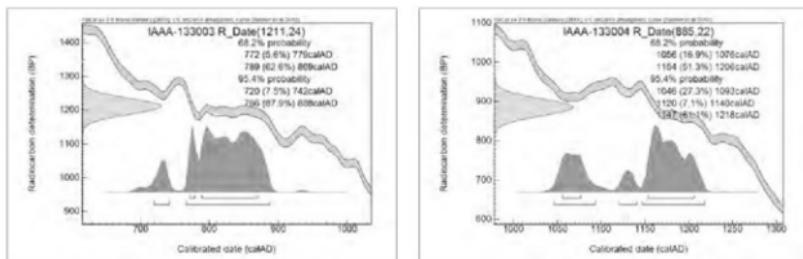
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%)(AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり Libby Age (yrBP) pMC (%)
IAAA-13300B	1	屋根：屋根	土壌	HCl	-39.47 ± 0.68	1210 ± 20 86.00 ± 0.26
IAAA-13300E	2	造様：D1 屋根：最下層	植物片	AAA	-29.72 ± 0.36	890 ± 20 89.57 ± 0.25

[46329]

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 年代範囲	2σ 年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-13300B	1120 ± 20	86.96 ± 0.23	1211 ± 24	772calAD - 779calAD (5.6%) 296calAD - 896calAD (62.6%)	720calAD - 742calAD (7.5%) 766calAD - 896calAD (67.9%)
IAAA-13300E	960 ± 20	88.70 ± 0.24	885 ± 22	1066calAD - 1076calAD (0.99%) 1154calAD - 1286calAD (61.2%)	1066calAD - 1093calAD (27.3%) 1120calAD - 1140calAD (7.1%) 1147calAD - 1218calAD (61.1%)

[参考値]



〔図版〕曆年較正年代グラフ(参考)

III 山王遺跡第147次調査

1 地理的環境

本遺跡は、七北田川の東岸約1km付近から砂押川西岸にかけての微高地及び低湿地上に立地している。東西約2km、南北約1kmの範囲に広がっており、市内でも最大規模の面積を有している。遺跡内の地形について詳細にみると、中央の県道沿いにある東西方向の微高地は、遺跡西端付近が標高6.5m前後と最も高く、南東側に向かって緩やかに傾斜している。南東部は標高3.5m程の低湿地であり、砂押川西岸に至る範囲は現在水田地帯となっている。また、遺跡の南側には東西方向に延びる旧七北田川の河道が埋没しており、昭和22年に撮影された航空写真にその痕跡を確認することができる。

2. 歴史的環境

調査区は、山王遺跡中央部北寄りの南宮字伊勢地区にあたる。前述した微高地上を東西に貫く県道泉塩釜線の北側に位置しており、現況は水田である。これまで本地区周辺では市教育委員会や宮城県教育厅文化財保護課により数カ所で発掘調査が実施されており（第1図）、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が多数発見されている。以下時代ごとに概観してみる。

古墳時代：前期では町・八幡地区から堅穴住居跡や水田跡が発見されている。水田跡については微高地南側の掻下し地区をはじめ西側に隣接する新田遺跡の各地点で確認されているが、堅穴住居跡の発見例は少なく、前期の焼失家屋が確認された町地区や、該期の土器が出土する東町浦地区や多賀前地区北側などに集落の存在が想定されている。中期では町地区で堅穴住居跡が7軒発見され、西町浦地区でも土壙から多量の遺物が出土している。東町浦地区や八幡地区でも該期の遺構・遺物が多数発見されていることから、



第1図 第147次調査区と周辺調査区

大規模な集落が展開していたものと考えられる。一方、後期になると本地区周辺では遺構・遺物はほとんど確認されなくなり、東側の八幡地区や西側に隣接する新田遺跡に集中して認められるようになる。

奈良・平安時代：奈良時代では、八幡地区で掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡が発見されているが、本地区周辺では該期の遺構はほとんど確認されていない。8世紀後葉頃になると多賀城外の幹線道路である南北大路と東西大路が整備され、このうち東西大路については東町浦地区で発見されている。平安時代では、県教委が実施した町地区の調査で、北2東西道路跡をはじめ多数の掘立柱建物跡が発見されている。当該区は城外に施工された方格地割りの西端と考えられている西9南北道路からさらに西へ200m離れた地点に位置しているが、遺構のあり方や変遷が地割り内と同様であることから、このような地割りがさらに西へ延びる可能性も指摘されている。一方、それ以外の地区においても、西町浦・東町浦・掃下し地区で掘立柱建物跡や溝跡、土壙などが発見されており、建物跡の多くは方格地割りの方向と概ね一致している様子が認められる。

中世：発見された遺構が少なく、不明な部分が多い。しかし、本地区南側の掃下し地区では、東西28m以上、南北34m以上の区画溝を巡らせた屋敷跡を発見しており、東側の八幡・伏石地区や西側に隣接する新田遺跡寿福寺地区などと同様な屋敷跡の可能性が推測されている。

近世：西町浦・町・伊勢各地区で近世の掘立柱建物跡や区画溝跡、井戸跡などが発見されている。西町浦地区では、かつて酒造業を営み塙竈一の宮の「御神酒屋」であった賀川家の敷地内を調査している。大規模な東西・南北の堀跡と井戸跡が発見され、堀跡からは陶磁器や土器・木製品・石製品が多量に出土している。町・伊勢地区でも堀で区画された屋敷跡が発見され、多数の掘立柱建物跡や井戸跡が確認されている。

3 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮宇伊勢地内におけるJ A仙台機械化センター建設に伴う本發掘調査である。平成26年10月より実施した試掘・確認調査（第145次調査）の成果を受けて、遺構が確認された精米工場建設部分について、本發掘調査を実施することとなった。11月14日、受託契約に向けた協議を行い、11月20日に契約を締結した。

調査は11月27日から開始した。第145次調査で確認した遺構埋土を掘り下げ、終了したものから順次平面・断面図を作成した。12月に入り雨天が続いたこともあり、これら作業に多くの時間を要したが、12月12日には各遺構の土層堆積状況写真、18日には調査区全景写真を撮影した。その後、平面図や断面図の補足作成、土層注記などを行い、年明けの1月14日に重機による埋め戻しを終了した。

4 調査成果

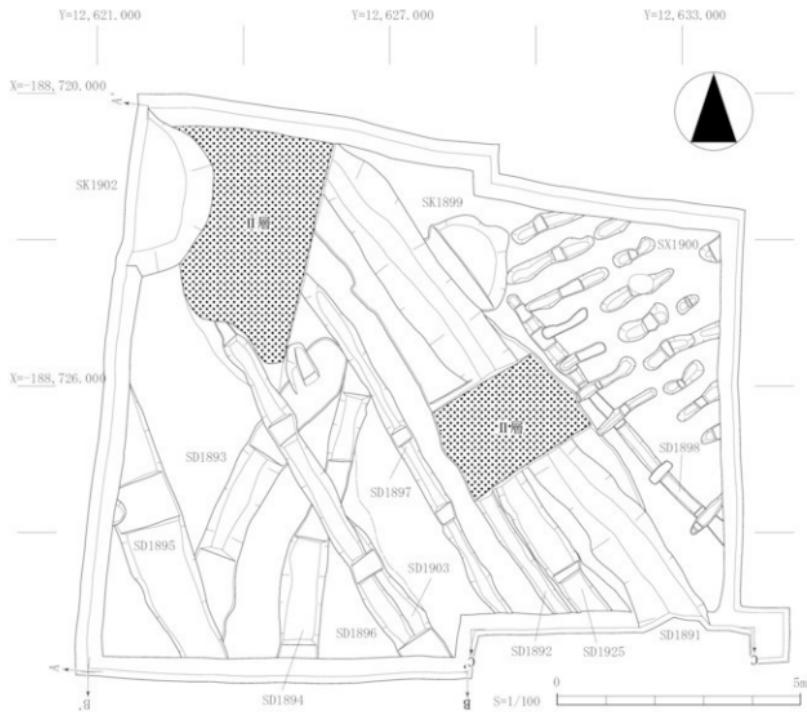
(1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである（第3図）。

I層：現代の水田耕作土である。

II層：暗黃灰色粘質土であり、厚さは5～10cmである。にぶい黄色砂質土や灰白色火山灰粒が僅か混入している。SK 1902の検出面である。

III層：調査区東半部に堆積している褐灰色粘質土であり、厚さは10～20cmである。SX 1900小溝群はこの層によって埋まっている。



第2図 遺構配置図

IV層：浅黄色又はにぶい黄色褐色砂質土が主体であり、古代の遺構検出面である。

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、IV層上面で溝跡や土壙、III層上面で土壙を発見した。以下、層序ごとに発見した遺構について記載する。

(a) IV層上面検出遺構

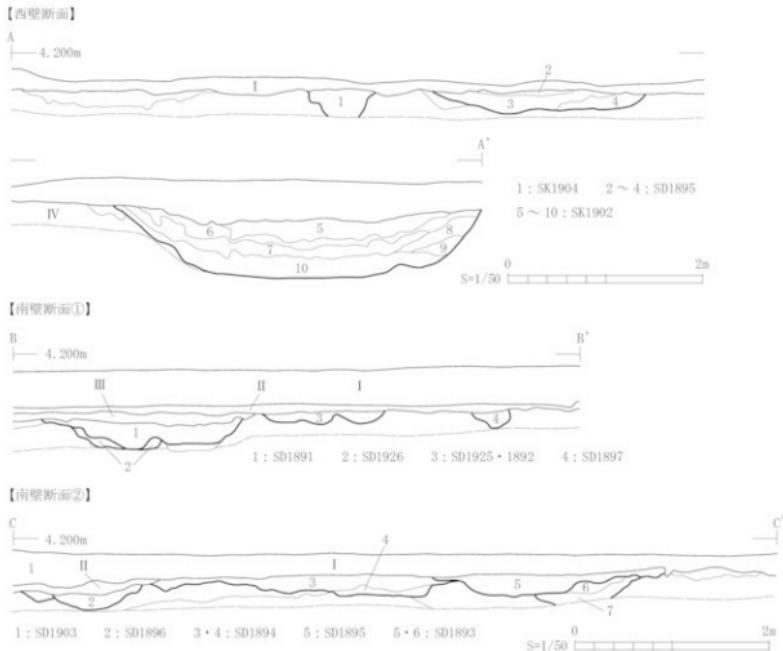
S D 1891溝跡(第4・6・7・8図)

【位置・形態】調査区中央で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複・変遷】S D 1926、S K 1899と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約37度西に偏している。規模は、長さは13m以上、上幅1.0～1.4cm、深さ約30cmである。

【壁・底面】壁は概ね緩やかである。底面は南側でやや起伏があるが、中央から北側では丸く窪んでいる。南から北に向かって僅かに低くなっている。南北の比高は5cmである。



第3図 西壁及び南壁断面図

【埋土】黒褐色粘土であり、浅黄色砂質土及び炭化物粒が僅かに混入している。また、上面の窪みには、Ⅲ層が堆積している。

【遺物】土師器壺(BⅡ類)・甕(A・B類)・須恵器壺(Ⅱa・Ⅲ類)・高台付壺・長頸瓶・甕・丸瓦が出土している。このうち、高台付壺の底部外面には、「丈部真廣」「本」の墨書が認められる。

S D 1926溝跡(第4・6・8図)

【位置・形態】調査区中央で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複・変遷】S D 1891・1925・S X 1900と重複し、それらよりも古い。

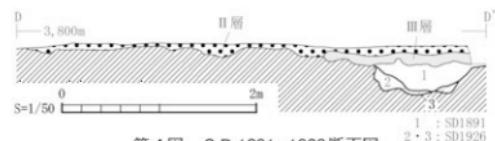
【方向・規模】方向は北で約35度西

に偏している。規模は、長さは13m以上、上幅0.65～1.9m、深さ20～40cmである。

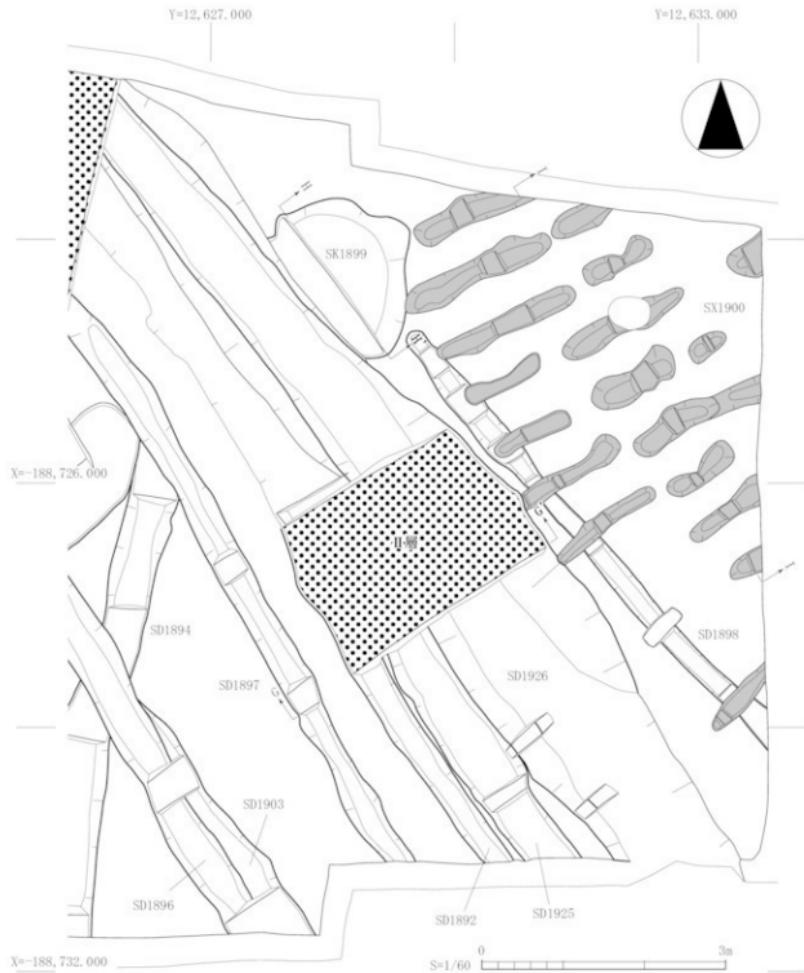
【壁・底面】壁は中央から南側は緩やかに、北側は急角度で立ち上がる。底面は起伏が著しい。南から北に向かって僅かに低くなっている。南北の比高は8cmである。

【埋土】浅黄色砂質土が多量に混入する黒褐色粘土。

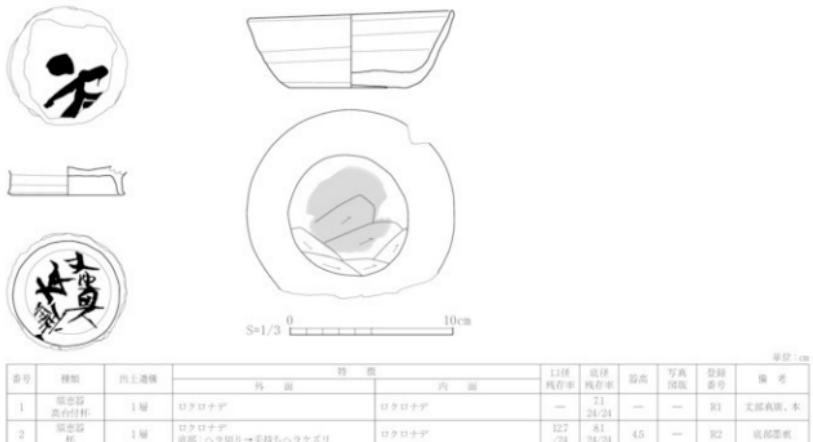
【遺物】出土していない。



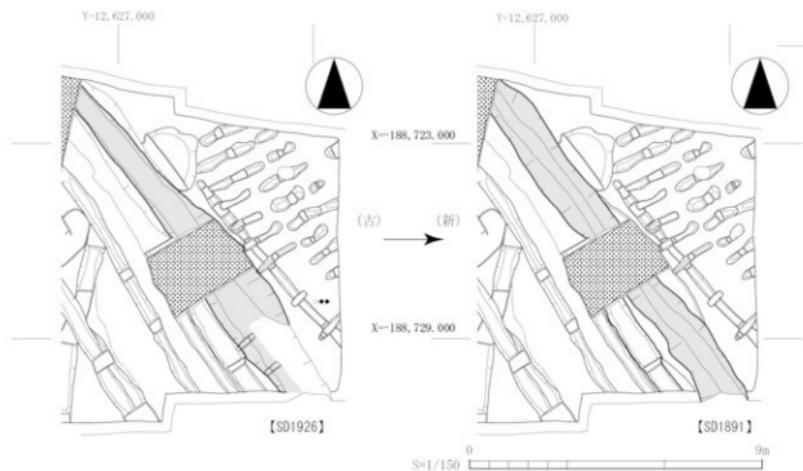
第4図 S D 1891・1926断面図



第6図 東半部遺構平面・断面図



第7図 SD 1891 C出土遺物



第8図 SD 1891・1926 新旧関係図

S D 1925溝跡（第4・6図）

【位置・形態】調査区中央で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複・変遷】S D 1926と重複し、それよりも新しい。なお、南壁でS D 1892とも接しているが、新旧関係を明らかにすることはできなかった。

【方向・規模】方向は北で約34度西に偏している。規模は、長さは4 m以上、上幅0.5～0.75 m、深さ約

12～15cmである。

【壁・底面】壁は概ね緩やかである。底面は起伏が多い。南から北に向かって僅かに低くなっている。南北の比高は4cmである。

【埋土】浅黄色砂質土がブロック状に、黒褐色粘土が斑状に混入する褐灰色粘質土である。

【遺物】土師器壺(B II a類)・壺B類、須恵器壺(Ⅲ・V類)・蓋・長頸瓶・壺、丸瓦(II類)が出土している。

S D 1893溝跡(第3・5図)

【位置・形態】調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1894～1897と重複し、S D 1894よりも新しく、S D 1895～1897よりも古い。

【方向・規模】湾曲しながら北で東に傾いている。規模は長さ75m以上、上幅0.8～1.0m、深さ28～30cmである。

【壁・底面】壁はやや凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面は丸みを帯びて窪んでいる。南から北に向かって僅かに低くなっている。南北の比高は5cmである。

【埋土】2層に細分することができる。上層がにぶい黄褐色砂質土、下層が黒褐色粘質土であり、ともに浅黄色砂質土が斑状に混入している。

【遺物】土師器壺(B類)・壺(A・B類)、須恵器壺(Ⅲ類)・高台付壺・蓋・瓶・壺が出土している。

S D 1894溝跡(第3・5図)

【位置・形態】調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1893・1896・1897と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は北で約11度東に偏している。規模は長さ75m以上、上幅0.5～0.9m、深さ10～20cmである。

【壁・底面】壁はやや凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面はおよそ平らに成形されている。南から北に向かって低くなっている。南北の比高は19cmである。

【埋土】オリーブ褐色粗砂である。

【遺物】土師器壺(A類)、須恵器高台付壺が出土している。

S D 1895溝跡(第3・5図)

【位置・形態】調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1893と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約20度西に偏している。規模は長さ7m以上、上幅0.9～1.4m、深さ26～30cmである。

【壁・底面】壁はやや凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面は若干起伏を伴いながら、丸みを帯びて窪んでいる。南から北に向かって僅かに低くなっている。南北の比高は3cmである。

【埋土】西壁で2層に細分することができる。いずれも褐灰色砂質土であり、上層には褐灰色粘質土、下層には灰白色火山灰粒が若干混入している。

【遺物】土師器壺(B II c類)・壺(B類)、須恵器壺(Ⅲ類)・壺が出土している。

S D 1896溝跡(第3・5図)

【位置・形態】調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1893・1894・1903と重複し、それよりも新しい。

S D 1893からは、土師器壺B類、壺A・B類、須恵器壺Ⅲ類が出土しており、①土師器壺にA類が少量含まれる、②須恵器壺ではⅢ類のみが出土しているといった特徴がある。出土点数は少ないものの、9世紀前葉～中葉頃のものと推測される。

S D 1894は、新旧関係でS D 1893よりも古いことから、9世紀前葉以前とすることができる。極めて少数ではあるものの出土遺物が土師器壺A類のみであることから、8世紀後葉以前まで遡る可能性もあるう。

S D 1897には10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰が二次堆積していることから、それ以降に埋まつたことが明らかである。

その他の遺構については、全てに土師器壺B類または壺B類が含まれていることや、10世紀前葉頃に出現すると考える須恵系土器が全く含まれていないことから、8世紀後葉～9世紀後半の範疇に収まるものと考えられる。

なお、S D 1891東側にあるS X 1900小溝群は、畠跡とされる大日北遺跡S X 98小溝群と同様のものと推測される。S D 1891最上面に堆積するⅢ層が直接埋土となっていることから、S D 1891が浅く窪んだ状態であった頃に機能していたことが明らかである。S D 1891におよそ直行していることや、それを超えて西側には及ばないことから判断すると、9世紀中葉頃にはS D 1891を境に東側が畠などの生産域、西側がそれ以外の空間といったような、場の使われ方が異なっていたものと推測される。

【Ⅱ層上面検出遺構】

S K 1902からは、10世紀前葉頃に出現すると考える須恵系土器が出土していることから、それ以降のものである。

【参考文献】

多賀城市教育委員会「高崎花の本地区試掘調査—加瀬用排水路整備工事関連調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第106集 2011

多賀城市教育委員会「多賀城市内の遺跡2—平成24年度ほか発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第111集 2013

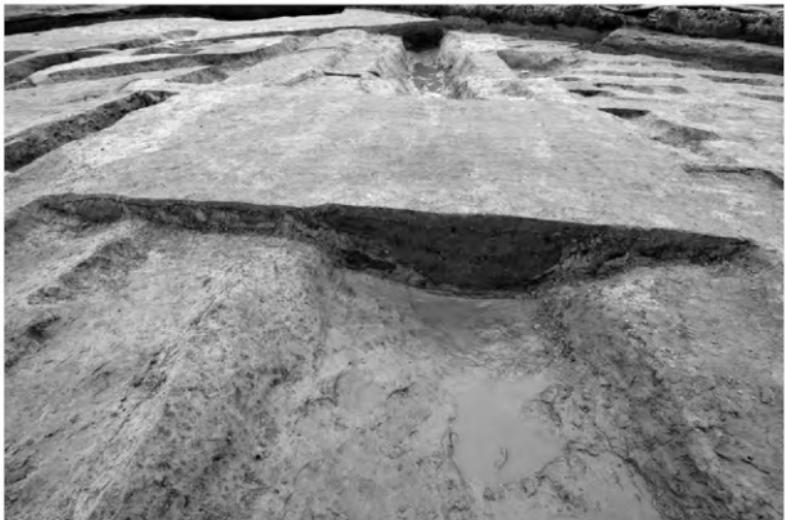


調査区遠景(東より)



調査区全景(南東より)

写真図版1



S D 1891・1926 ほか土層断面(南より)



II 層及び S D 1897 土層断面(北より)

写真図版2



SK 1899断面(東より)



SK 1902断面(東より)

写真図版3



墨書き土器 第7図1 R 1



須恵器杯 第7図2 R 2

写真図版4

報告書抄録

ふりがな	にいだ・さんのういせき
書名	新田・山王遺跡
副書名	新田遺跡第97次・山王遺跡第147次発掘調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第121集
編著者名	武田健市 村松稔
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel:022-368-0134
発行年月日	西暦2015年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 (第97次)	宮城県多賀城市 新田字西後 41番43番1の一部	042099	18012	38度 17分 46秒	140度 57分 32秒	20131101 / 20140124	309m ²	宅地造成
山王遺跡 (第147次)	宮城県多賀城市 南宮字伊勢98-90地内	042099	18013	38度 18分 09秒	140度 58分 27秒	20141127 / 20150114	126m ²	JA 機械化 センター 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物		特記事項		
新田遺跡 (第97次)	集落	古代 中世	竪穴住居跡・ 掘立柱建物跡・ 烟跡・溝跡	土師器・須恵器				
山王遺跡 (第147次)	古代都市	古代	溝跡・烟跡	土師器・須恵器・ 墨書き土器				

多賀城市文化財調査報告書第121集

新田・山王遺跡

新田遺跡第97次・山王遺跡第147次

発掘調査報告書

平成27年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の日西町2番10号

電話 (022) 288-6123

